

初心者が「ピアノによる弾き歌い」を4ヶ月で2曲マスターするための助力となり得る方法の可能性について (その3)

高橋 寛 幼児教育科

(2013年9月24日受理)

〔要約〕

ピアノの学習経験に乏しい学生たちが、4ヶ月間で2曲の子どものための歌を、ピアノを使っての弾き歌いがマスターできるようになるための、有効な方法を探ってみた。17年間に演習として徐々に進化してきた著者の授業の中に、学生の人間的成長にも寄与できるその近道が隠されているか、検討した。イントロダクション、脱力・呼吸・発声・リトミック、という内容を繰り返すことで、徐々にではあるが、「自身の存在をコミュニケーションの発信機にする」必要性を理解し、そうありたいとする気持ちが醸成されてきたところを見計らって、次なる段階へ学生をいざなうことが学生たちの音楽習得に有効に作用しているとの感触をつかめた。更に、短大入学以前の教育機関での音楽の授業ではなかなか理解しにくかった音楽の基礎知識や音楽理論について、著者の解説手法(実例・実演を交えながらのアナログで丁寧な口演)やアプローチの方法(学生の疑問・質問を第一義に内容を構成する)が音楽入門編(初心者向き)として確かな効果を生み、学生たちの「理解してみよう」という意欲を増進させていることが、学生たちの授業中の反応や種々のレポートなどにより明らかになってきた。

I. はじめに

日本に西洋音楽が輸入されて久しい今日ではあるが、ピアノや声楽を学ぶきっかけが「音楽をコミュニケーションの手段として使う」ことである人はそう多くはない筈だ・・・と音楽大学で学んだ経験上、筆者は確信するし、「使える程度にその技術を修得している」人は更に少ないということは、多くの共演者と様々なジャンルの舞台を経験してきた上で筆者は感じている。幼児教育者に相応しい「ピアノによる弾き歌い」を短期間でマスターさせることは、幼児教育者養成校にとって、子どもの表現に係る保育技術を保育との関連で習得できるようにするという観点から、必須のことであろう。本論では、筆者が短期大学という教育の現場で実践に基づき可能とし得た表記の項目について、人の成長の可能性と阿吽のチームワークの重要性を論じつつ述べたいと思う。

II. 目的・方法

必修科目である音楽基礎A(歌)、子どもと音楽A(歌)、子どもと音楽C(歌)の3つの教科(平成22年度までは「音楽I(声楽)」「音楽III(声楽)」)はともに「歌うこと」を基本にすえての音楽の基礎的な知識と技術の修得を目指すのであるが、これらを著者が1名で担当している。本研究では、学生たちが、筆者の体験してきた舞台表現のエッセンスを迫体験しながら「学ぶ」

「習得する」過程での人間的成長を確実に果たせるかどうかを明らかにしていく。

以下は、過去17年間の羽陽学園短期大学幼児教育科に入学したすべての学生が保育士資格取得のための「必修科目」として履修し、体験し成果として「2曲の弾き歌い」「音楽をコミュニケーションの手段の一つとして使う」ことが可能になる過程を記したものである。ただ、入学年度によっては学生の個性が際立って異なる場合もあったので、それに応じて15回の授業のうちの複数回の実施順序を入れ替えた年度もあるが、内容としては総合的に同一である。

目的を達成するために以下の方法を用い、実践の中で、ピアノ音と自分の声との対話により「音程」の感覚と「ピアノの鍵盤の配列」を学ばせ、「テンポ」「調性」「拍子」といった音楽理論上の規則の持つ意味に気づかせようと試みた。

1. 弾き歌い実技④、子どもの声、長調と短調、ピアノ・コード①(8回目の授業)
2. 弾き歌い実技⑤、子どもの歌(夏①)、ピアノ・コード②(9回目の授業)
3. 弾き歌い実技⑥(変奏・発展版)、子どもの歌(夏②)、(10回目の授業)
4. 弾き歌い実技⑦、童謡の舞台表現化①(11回目の授業)

譜例-⑩-a 「14ひきのこもりうた」の発展型 (Arpeggio)
 ~左手のポジションをオクターブ高い位置に移動~

5. 童謡の舞台表現化②、人間オーケストラ① (12回目の授業)

(1回目から7回目までの授業についてはすでに《その1》《その2》で述べた)

III. 実践

1. 弾き歌い実技④、子どもの声、長調と短調、ピアノ・コード① (8回目の授業)

(1)子どもの声 (童謡が誕生した大正時代と最近の子どもの声の調性の変化) について理解を深めさせる。

- ・子どもが歌うときのKeyについて話す。(社)日本童謡協会の作曲家諸氏(湯山昭、早川史郎、佐藤宣弘ほか)によれば、歌声としての子どものKey(調性)は、昭和のはじめの時代から比較すると、短3度(半音3個分)近く低くなっているとのこと。このことを実感できるのが、原曲の調性で「毎日の子どもの歌」を学生たちが、全員で歌ってみる時である。更に、当時の童謡歌手(河村順子、安田祥子など)の歌唱音源のCD^(註1)(月の沙漠~佐々木すぐる傑作集)を聴く事により、現代の子どもには歌唱し得ない声域であることが理解できる。
- ・主な原因として、音響機器の発達、殊に低音を良く伝えるスピーカーやヘッドフォンの開発により、低周波音をキャッチしやすい環境で子どもたちが育ってきていることと、体格の向上があるだろうという推論を伝える。

(2)長調と短調について、また、ピアノによるコード演奏についての理解を深めさせる。

- ・短調と長調、ハーモニーのマイナーとメジャーについて、簡潔に説明する。三和音(ある一つの音の上に、その3度と5度の音を重ねたもの)を構成するうちの1番低い音(つまり第1音・右手

ならば通常は親指で押さえる)から、真ん中の音(つまり第3音・右手ならば通常は中指で押さえる)へ、長い距離(半音4個分)に位置するものは長調・メジャーであり、短い距離(半音3個分)に位置する場合は短調・マイナーであること、そして、第1音から第5音(3和音の1番高い音・右手なら通常は小指で押さえる)までの距離は、長調(メジャー)でも短調(マイナー)でも同じ(半音7個目)であることを、譜面を板書しつつピアノで音を奏でながら説明する。

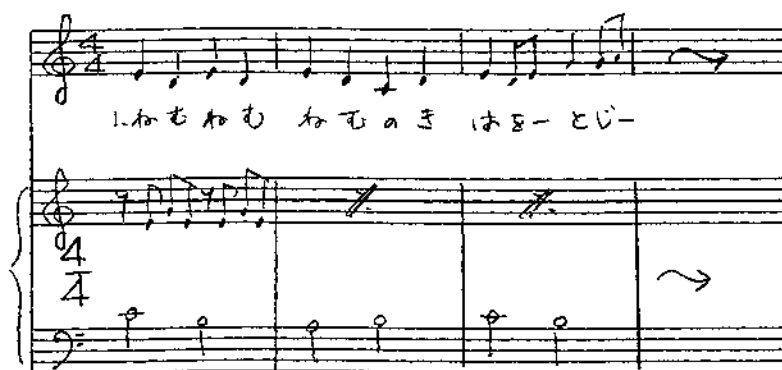
(3)弾き歌い実技④-A

~復習と編曲の方法~

- ・「14ひきのこもりうた」の弾き歌いで、更なるアレンジバージョンに挑戦した学生の発表の場を設ける。
- ・やはり公開レッスン方式なので、より「子守唄」的な音の響きを出すための教員からの助言を、学生たちは真剣にメモをとりながら聞くことになる。たとえば、曲の冒頭の右手部分の和音をArpeggio(アルペジオ)形に変換する場合、譜例の様に八分休符のあとに「ミ・ソ(3度上の)・ミ」という八分音符のつながりで演奏するならば、左手のポジションはオクターブ上方に移して右手のポジションと近付けるほうが望ましいし響きが得られ(⑩-a)、できれば右手を「ソ・ミ(6度上の)・ソ」、と置き換えた上に両手のポジションを更にオクターブ高い位置に移し、かつ長音ペダルを使用すると、いかにも「子守り歌風」の響きが得られ、より効果的である(⑩-b)ことを、実演を交えながら説明していく。

(4)弾き歌い実技④-B

~両手で付点のリズムを刻む(左手がメロディーと強拍、右手は和音で弱拍)ピアノの演奏法に挑戦さ



譜例-⑩-b 「14ひきのこもりうた」の発展型 (Arpeggio)
 ~右手を6度の分散型にし、かつ両手を更に高い音に移動~



譜例-⑪ 「パンダうさぎコアラ」

せ、快活に弾き歌いをするという、保育現場での活用をより重視した楽曲を習得させる～

- ・教員の編曲による「パンダうさぎコアラ」（詞：高田ひろお／曲：乾 裕樹／編曲：たかはし かん）の弾き歌い用の手書きの楽譜を配布し、教員のピアノ伴奏に乗せて、全員で歌ってみる。記譜されたいろいろな情報について説明を加える。（譜例-⑪）
- ・次回からこの曲を使った弾き歌いの演習（まずは曲の前半を必修）になることを告げ、就職試験時には（卒業生たちの申し送り事項として）オリジナル編曲譜による「特技披露」が効果的であるこ

とを伝えておく。

2. 弾き歌い実技⑤、こどもの歌（夏①）、ピアノ・コード②（9回目の授業）

(1)弾き歌い実技⑤

～公開レッスン方式による様々なアプローチと助言～

- ・「パンダうさぎコアラ」の冒頭部分を全員で歌った後で、各人の発表となる。今回の課題としては曲の前半までであるが、最後まで演奏できるものは、トライするように励まし薦める。ただし今回は時間制限を設けることをはじめに告げて、前半45分を過ぎたら次の内容に移る。

- ・この場合、例年出現するピアノ演奏上の間違いが出現したら（勘違いだったり、技術面で難しかったりが原因）随時、指摘していく。教員の実演（学生の間違いをコピー演奏し、正解との2種類を比較して聞かせてみる）に学生は大笑いするが、次週にも同じ間違い演奏を披露してしまう者が各クラスに出現するのが恒例である。例えば、左手と右手でのウキウキしたスキップ状のリズムが刻めず、両手とも八分音符で演奏し「足首の硬い人の駆け足」のようなギスギスしたリズム (⑫-a) になったり、歌い始めの小節の最後の右手和音（十六分音符）から次の小節冒頭の同じ右手和音（付点八分音符）への連打がなかなかスムーズに出来なくて（要するに小節線を跨ぐ度に音楽の流れが遮断され、空白な時間が生じる）「登場の仕方の間が悪く、客がズッコケてしまう半端な待たせ方をしてしまうパンダ」のような演奏 (⑫-b) になったりである。
- ・(⑫-a) に陥る学生は、3連音符の感覚をつかみきれないことが原因なので、前奏時に（パンダパンダパンダ）と歌いながら弾くことを勧める。また、3連音符の2個目がきちんと意識されず（歌唱法では『ン』を歌えていない状態）、1個

目と2個目の音符が一体化したようなリズムは違うよ・・・と指摘する。そして歌い始めて2小節目の1拍目と3拍目（パンダ）の（ダ）から直後の四分休符につながる部分では（パンダ・ポーン）と歌えるようなタイミングで演奏すべしと助言を与える (⑫-c)。「おいで」の『い』の歌唱法についても同様の助言を与える。

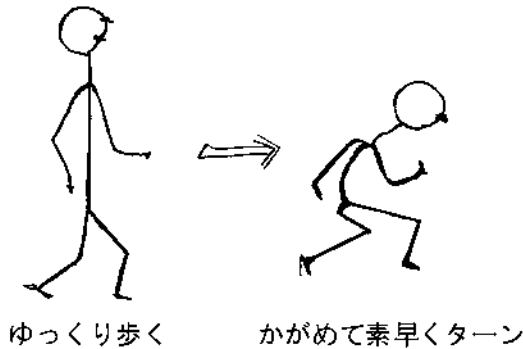
- ・(⑫-b) に陥る学生には、身体運動としての助言をする。つまり、右手のドミソの和音を歌い始めの1小節目最後（おいでの『で』にあたる部分）から2小節目最初（パンダの『パ』）の部分に素早く連打しなければならないことについては、ほかの部分の手首の上げ下ろしのスピード感覚では対応が困難なことを実演してみせ確認させる。身体をコンパクトにかがめて急カーブを駆け抜けようとする時や、バスケットボールの選手がドリブルによるフェイントを試み、スピードとコースを変えて相手ディフェンスを抜き去ろうとするときの、ボールのバウンドの高さの違いなど、身近な例を用いて説明する。もちろん、教員の身体を使っての実演もして見せる。(⑫-d=参考図) この時、3回目の授業（脱力・呼吸・発声・リトミック～②:羽陽学園短期大学紀要 第9巻第2号に既載）

譜例-⑫-a 「足首の硬い人の駆け足」のようなギスギスしたリズム

譜例-⑫-b 「登場の仕方の間が悪く、客がズッコケてしまうパンダ」



譜例-⑫-c 「三連音符の感覚を掴むための助言」



譜例-⑫-d 参考図

での体験を学生たちに思い出させると、課題点の理解とその解決に効果的である。更に、学生と教員が「並んでスキップしながら歌う」という行為を、全員の前で示すと、ほとんどの学生たちは、この3連音符のリズムの在り様と習得方法について、理解を深めることになる。

(2)子どもの歌（夏①）

～「こどもの歌ベストテン」（ドレミ出版）の中から季節の歌を取り出し、歌い、味わう、楽曲や作家についての理解を深めさせる～

- ・「子どもの夏の歌」を全員で歌う。教員は臨機応変なピアノ伴奏にて工夫し、また、楽曲にまつわる種々のエピソード（作家・時代背景・望ましい歌唱法）を織り込みながら展開する。教員が、童謡の業界にも現役の歌手として身をおき、著名な現役の作詞家・作曲家・演奏家（例えば、やなせたかし氏や湯山昭氏など）との童謡祭^(註1)などの仕事場での懇談の様態を話し学生の興味を惹きつける。
- ・今回は「めだかのがっこう」（詞：茶木 滋）までで中断し、中田喜直氏の作曲による春夏秋冬それぞれの4曲のヒット曲「めだかのがっこう」（詞：

茶木 滋）、「夏の思い出」（詞：江間章子）、「ちいさい秋みつけた」（詞：サトウハチロー）、「雪の降る街を」（詞：内村直也）に関連して、氏との数回におよぶ共演（教員が歌手、中田氏がピアニスト）や、童謡業界での様々な場面での会話やエピソードを、詳しく話す。後々のミニ筆記試験（16回目の補講時に実施する）問題に関わってくる重要な項目である。

- ・庄内地方出身の学生には「雪の降る街を」の詩のモデルが鶴岡市であることを強く伝え、郷土愛の重要性を訴える。
- ・前・日本童謡協会会長の故・中田喜直氏の嫌煙家ぶりを示すエピソードとして「死後の著作権料は、『禁煙の勧め』の出版物を各地の図書館に寄贈するために使用するつもり」・・・と中田氏から何度も聞いていることを話す。
- ・前回までに配布している（コード・ネームのプリント）の6～12ページについて説明する。コードの仕組みとその読み取り法、それを知っていればこんなに便利だぞ・・・という観点から、コード・ネームを知ることの重要性について力説する。また、教員が「編曲」「作曲」の仕事をするように

なったきっかけは、このコード・ネームを読み取っての「レストランでの我儘な酔客相手の生ピアノ伴奏（後のカラ・オケに対比すればナマ・オケであり、客の持ち声に合わせた調性の変更＝キー・チェンジャーや、曲の気分に合わせて曲想の変更＝曲のテンポ変更や小節数の伸縮を瞬時に満たすピアノ伴奏）のアルバイト」がきっかけであったことも、当時のエピソードとともに伝える。

- ・「毎日の子どもの歌」の中から課題曲を3曲（「おべんとうの歌」詞：矢野 蝶／曲：一宮道子、など）指定し、そのどれかを2週間後に弾き歌いするという課題を提示する。

3. 弾き歌い実技⑥（変奏・発展版）、子どもの歌（夏②）（10回目の授業）

(1)弾き歌い⑥

～2つの課題曲について、練習の成果を発表し、また更に編曲した形で発表したりして、実技の習熟度ま増す喜びを体験させる～

- ・「パンダうさぎコアラ」の弾き歌いを発表しあう。前回、発表しそびれた者から優先に、まずは前半部分のみを全員の課題として。可能な者は最後まで演奏しても良い。前回の助言を参考にして演奏が改善されている例が見受けられたら、必ず誉める。特に、入学時に「ピアノは全くの初心者」と確認できている学生については、注意深くその成長振りを見守る。
- ・「14ひきのこもりうた」では、オルゴール風な伴奏形に発展させた学生の発表の場ともなる。可能な弱音ペダルや長音ペダルも使わせてみて、その有効な使用方法とともに、演奏における効果を全員が共有する。

(2)子どもの歌（夏②）

～「こどもの歌ベストテン」（ドレミ出版）の中から、前回授業時の続きの季節の歌を取り出し、歌い、味わう、楽曲や作家についての理解を深めさせる～

- ・「子どもの夏の歌」の2回目。前回授業時からの続きを全員で数曲、歌ってみる。
- ・特に「あめふりくまのこ」（詞：鶴見正夫／曲：湯山 昭）では原曲（前述の曲集に収録されている楽譜は、平易な調に移調された上、やや簡略化されたものである）に記載されている音楽用語 *meno mosso* と *a tempo* という5番の終わり部分から後奏にかけての楽譜を板書し、曲想を説明し教員が実演してみせる。その意味合い「ゆっくりのテンポになっての5番は、がっかりして葉っぱの傘をかぶり、ため息をつく熊の子・・・かわいそ

うねえ・・・という子どもたちの情動に寄り添う感じ。一転してさりとスピーディーに後奏を弾き『お話はお仕舞い!』と切り上げる様子」を全員で味わい、確認する。

今回は全員が最後まで「パンダうさぎコアラ」を発表し、「毎日の子どもの歌」の中からのかねてからの課題曲である3曲（おべんとうの歌、など）のどれかを弾き歌いするという課題の確認をして終わる。

4. 弾き歌い実技⑦、童謡の舞台表現化①（11回目の授業）

(1)弾き歌い実技⑦

～練習したピアノと歌の実技を発表し合い、他者の成長・変化にも目を向けさせる～

- ・まず、「パンダ うさぎ コアラ」の弾き歌いの演習が未発表・未完成の学生が挑戦する。三連音符の感覚はこの頃にはほぼ全員が理解・体得している事になる。ただ、歌い始めて9小節目からの「パンダ うさぎ コアラ」の連続する部分で、四分音符の箇所の時間の流れが速く（無きが如く短縮する学生も稀に出現する）になってしまう学生が出現したりする。こうした場合は、音楽の基本的な性質「一度始まったら勝手に止まらない、指示無く速度や拍子を変更してはならない」という授業の初期に講義した内容の復習を必ず行う。そして、なぜそのことが重要かを実感する為に、教員が演じる『勝手に速度や拍子を変えたり、止まったりするピアニスト』の伴奏に合わせて全員で合唱してみる。学生たちは、非常に、歌い難くまとまりの無い音楽になることを体験することになる。

(2)童謡の舞台表現化①

～親しみやすい楽曲を用いて、表現方法を変える面白さに気付かせる～

- ・「こどもの歌ベストテン」の曲集の中から「保育や行事などでよく使用される子どもの歌」を数曲選択し、全員で歌ってみる。「おもちゃのチャチャチャ」（詞：野坂昭如／補詞：吉岡 治／曲：越部信義）では手拍子を催促してみるが、歌詞の「チャチャチャ」部分にすべて手拍子を加える間違いに気づかせる。音楽用語としての「Tempo di Cha Cha Cha」を解説し、映画「アパートの鍵貸します」（監督：B. ワイルダー）で主演男優：ジャック・レモン氏が作品中で踊るシーンをしばし鑑賞した後に、教員が少し踊って見せる。教員の真似をしながら、学生も全員、その場で踊ってみることになる。体感として「チャチャチャ」を

つかめるようにする。

- ・「いぬのおまわりさん」（詞：さとう よしみ／曲：大中 恩）を全員で歌ってみる。2番まで歌い切ったところで、楽譜を閉じさせ、歌詞を思い出させてみる。つまり、全員で、詩を暗唱してみるのである。すると、メロディーらしきものが学生たちの口から漏れ始める。このことは「歌えば詩をなぞれるが、言葉だけだと世界観が成立していない」ことの露見であることを学生に伝え、『歌う』ことの根本が「言葉による世界観の把握」であることを再確認させる。
- ・次にこの「いぬのおまわりさん」では、ナレーター、犬、子猫、カラス、すずめ、の登場人物をしっかりと把握させ、ナレーション以外の部分は直接話法としての歌唱を試みさせる。何回か「止めては歌い」を繰り返すうちに、各キャラクターが明確になってくる。着席している場所で大まかにセクションを作り、学生たちをそれぞれのキャラクター（犬、子猫・etc.）に分けて、お互いに分割した歌詞（割り台詞のように）を掛け合いつつ歌唱する面白さを体験する。このことは、た

だ説明的な1人称による歌唱よりも、聴く側、殊に幼児にとっては「ドラマとしての歌の記憶」となるので、大切な表現のエッセンスであることを伝える。

- ・学生たちを5～6名ずつのグループに再編成させ、その中で上記「いぬのおまわりさん」の全てのキャラクターがまかなえるように話し合わせる。そして、この楽曲を使い、ささやかな音楽劇のように仕上げて、各グループで1週間後に発表しようという課題を提示し、自主練習を奨励する。
- ・「ひらひらひら」（作詞：村田さち子／作曲：乾 裕樹）というやや新しい童謡を歌ってみる。上級生たちが学外でのイベントで発表した手遊び（カレーライス之歌、アルプス一万尺・etc.）も加えて学生に伝え、全員で乳幼児向けの手遊び歌として、パフォーマンスし、味わってみる。

5. 童謡の舞台表現化②、人間オーケストラ①（12回目の授業）

(1)童謡の舞台表現化②

～『童謡を演じる』という表現方法の面白さに触れ、

「いぬのおまわりさん」

詞：さとう よしみ／曲：大中 恩

まいごの まいごの こねこちゃん あなたの おうちは どこですか
(ナレーター) (犬)

おうちを きいても わからない なまえを きいても わからない
(ナレーター) (ねこ) (ナレーター) (ねこ)

ニャン ニャン ニャン ニャン ニャン ニャン ニャン ニャン
(ねこ)

ないてばかりいる こねこちゃん いぬのおまわりさん こまってしまうて
(ナレーター)

ワン ワン ワン ワン ワン ワン ワン ワン
(いぬ)

まいごの まいごの こねこちゃん このこの おうちは どこですか
(ナレーター) (いぬ)

からずに きいても わからない すずめに きいても わからない
(ナレーター) (からず) (ナレーター) (すずめ)

ニャン ニャン ニャン ニャン ニャン ニャン ニャン ニャン
(ねこ)

ないてばかりいる こねこちゃん いぬのおまわりさん こまってしまうて
(ナレーター)

ワン ワン ワン ワン ワン ワン ワン ワン
(いぬ)

譜例-⑬ 「いぬおまわりさん」歌詞とキャラクター別の仕分け表

味わい、気付かせる～

- ・前回に続き「いぬのおまわりさん」(詞：さとう よしみ/曲：大中 恩)を全員で楽譜を見ずに歌ってみる。『歌う』ことの根本が「言葉による世界観の把握」であることを再確認する。
- ・次に「いぬのおまわりさん」、を前回、再編成された各グループで、ナレーター、犬、子猫、カラス、すずめ、の登場人物に分けたキャストイングに基づき、ささやかな音楽劇のように仕立てて発表し合う。事前に各グループに分かれて、自主練習を20分ほど行う。
- ・ピアノ伴奏は教員が援助するが、さまざまな演出・表現方法が学生たちから提示されることになる。数年間の事例を挙げると、時代劇風のもの、今様の街角ナンパ風のもの、おとぎ話風のもの、タイムトラベラーもの、幼稚園の一日風のもの・・・という具合である。
- ・学生たちは同じ楽曲を元にして、さまざまなストーリー展開が可能であることを体験し、お互いの感性を認め合い、更には将来への「表現の引き出し」を多く得ることとなる。

(2)人間オーケストラ①

～自身の身体から出せる音(ア・カペラ・コーラス

と手拍子など)で音楽を作り出すことの楽しさに気付かせる～

- ・次の展開に移る。教員の著書『人間オーケストラ 体は楽器だ!』(本学教授：田中ふみ子との共著/いかだ社)^(註2)の中から、「いつも何度でも」(詞：覚 和歌子/曲：木村 弓/編曲：たかはし かん)のA・カペラ3部合唱を教材として取り上げ、全員での演奏にトライする。
- ・楽譜を全員に配り、教員がピアノと自身の歌唱により学生たちに徐々に全体像を伝授していく。最初に全員でメロディーの書かれている箇所を探しながら(主旋律は8小節ごとにパート間を移動するように編曲してある)斉唱し、その後、各自がⅠ(やや高音)、Ⅱ(中音)、Ⅲ(やや低音)のそれぞれのパートをすべてして歌唱してみる。
- ・その上で各自のパートを決めさせる。その際に、クラスの中でのパートの人数のバランスは『Ⅱ>Ⅲ>Ⅰ』が理想であるというコーラスの一般論を学生に伝え、彼らが話し合いの中で初期の希望からパートを移動していくのを教員は(控えめな助言をしつつ)待つことになる。次いで、各パートごとに座席を組み替えての練習に移る。2度ほど各パートごとの「音取り=譜読み」を終えたら、

いつも何度でも
 詞/覚和歌子 曲/木村弓 編曲/たかはしかん

© 2017 by STUDIO CHIEFI.

歌詞が書かれていない部分は「ル～」でスキップする。

譜例-⑫ 「いつも何度でも」(ア・カペラ3部合唱)

学生たちの自主練習（15分ほど）に移行し、再集合して合同の「ハモリ」の練習に移る。

- ・ある程度のハーモニーが醸し出されてきたら、一度、ア・カベラ（無伴奏）での合唱を試みる。そして、あと2回の授業の後には、他のクラスとの合同発表会を行う予定を伝える。（授業時間以外でのクラスとしての自主練習を強く勧める）
- ・今回は、「シニア世代の愛唱歌」という曲集も持参するように伝える。

IV. 結果と考察

毎回の授業の振り返り時や、最終回での授業全体の振り返りの対話の中で、以下のことが明らかになってきている。

- ① 『3連音符の連続型の楽曲を、両手を交互に駆使してピアノで弾き歌う』という、ピアノ習熟度初心者には難関と思われる課題は、リトミックを伴った身体訓練（3回目までの授業で実施）や、公開レッスン形式で段階を踏んだ弾き歌いの実技指導（7回目までの授業で実施）の効果により、全員がある程度の及第点まで到達できたものと思われる。
- ② ピアノの伴奏形を少し変化させる（音の並べ替え）だけで、簡単な編曲が可能であるということに気付かせることが出来たと思われる。また、その他のいくつかの編曲方法についても、興味を持たせることが出来たと思われる。
- ③ 慣れ親しんだ唱歌や童謡を、歌唱方法や歌詞を変えてみるだけで新しい作品のように楽しめることに気付かせ、また、保育の現場での既製の楽曲の多様な活用する方法にも気付かせることが出来たと思われる。
- ④ ア・カベラでの合唱練習をするうちに、パート間のコミュニケーションの必要性和音楽的役割の相互理解の重要性に気付かせることが出来たと思われる。更に、その過程で各人の個性・気質にお互いが気付き、より円滑なクラス運営の一助として役立ったように思える。
- ⑤ 全学で積極的に実施している「授業評価」からは以下のことが読み取れる。
 - ・平成18年から22年の5年間の授業評価からは、途中で体調不良などの理由により次年度に再履修となったり、年度途中で休学や退学となったりした学生を除けば、概ね出席率も良く学習態度も積極的で、授業自体を楽しんでいるようだったことが伺える記述が多い。成績は以下である。

（5年分のまとめ）

- 優（80点以上）・・・24～53%
- 良（70点以上）・・・46～75%
- 可（60点以上）・・・0～8%

V. 終わりに

本研究の更なる発展型としては、著者の中で確立している（多数の聴衆から歓迎され支持を受けている）『日本語による子どもの歌の歌唱法』を学生たちに伝え実演させ、それを世に出して（コンサートなどに出演させて）、観客の反応を得つつ、それが是か非かを問う・・・ということになろうかと思う。『日本語の歌唱法』の理想型は音楽大学の外国オペラに没頭しているクラシックの声乐専攻者の嗜好により種々存在したり、『子どもの歌の歌唱法』の理想型が作詞家・作曲家の嗜好によりやはり種々存在したり・・・というのが、日本の音楽会の現状であるように思われる。音楽は実演であり、時間の経過とともに消え去るものであるが、文章に残すための実演の連続は、研究を継続していくために不可欠であろう。次回からはこの課題にも取り組んでいきたい。

本編で述べた筆者の実践；限られた時間・設備で異なる個性の学生110人前後（1回が30人弱の編成で、4回転・・・つまり1学年に30人弱のクラスが4クラスあるので、短大でのこの授業は同一内容を4回ずつ実施するのである）「学生のニーズを嗅ぎ取り、己の持ちうるシーズで使えるものは全て活用する」作業の連続が、「魅力ある授業と養成校」を形成するのであろうし、その地道な努力を継続する活力はどこから来るのか？

それは、このような「論文」の形式でない「出張授業」^(註4)や「不特定多数の観客を相手にした公演や講演」^(註5)に際しての、遠慮のない聴衆の反応（フィード・バック：相手が学生や学会の専門分野の人間でない不特定多数の場合は、本当の意味で『フィード・バック』である）こそが「自身の今の在り様・人生の歩み方・専門分野の技量や魅力の程度」を探る最良の方法であるという著者の信念でからである。

これからは、学生をもこの『フィード・バック』の得られる場に連れ出して実演の経験を積みませ（まるで各種施設での実習のように）、学生とともにその事象を振り返ることが、本研究には有効であろうと思われる。

「興味のあることを、やりたい時にだけ、簡単に効果が見込めるならば、苦労せず恥もかかずに手に入れたいなあ」というのが、著者が感じる昨今の学生の印象であるが、そんな『今様大学生』をどうやって自分の担当科目の熱心な参加者にしていくか、苦悩されて

いる教員たちへの一助として、この論文が寄与できれば幸いである。

《註》

(註1) CD「月の沙漠～佐々木すぐる傑作集 日本コロムビアGES-9889-CP」安田祥子、河村順子、久保木幸子、松田トシ、安西愛子などの歌唱が収録されている。

(註2) 2013年9月7日開催の36回目の公演にも出演した日本童謡協会主催の「童謡祭」には、ほぼレギューラーの歌手として20回以上の出演、やなせたかし氏や故・中田喜直氏ほかの童謡界の重鎮との共演・交流がある。

また故・川田正子氏との共演が常の「金の鳥音楽祭」にも数年に渡り出演し、氏の晩年まで交流があった。

(註3) NHK-TV(BS)の番組「熱血!ふるさと対抗・千人のカンテスト」に羽陽学園短大学生が中心となり天童市民とともに参加・出演して好評だったため、在京の教育教材系出版社「いかだ社」より依頼があり、本学の田中ふみ子教授との共著として出版され、全国で2万部以上の売り上げを見た、「体を使って出せる音をすべて音楽の材料にして楽しむ方法」の著作。

(註4) 高大連携事業として山形県立天童高校で2010年から継続している「保育内容総論＝現：保育実践研究Ⅲ」での出張授業などが、年に数回ほどある。

(註5) 例を挙げれば、筆者が台本・構成をし、歌と司会を務めながら羽陽短大の学生を共演させつつ2011～2013年度に山形県内数箇所を巡演した「0才児からのコンサート 親子で楽しいオーケストラ」は山形県生涯学習文化財団の主催で、山形交響楽団(プロのフル・オーケストラ)の復興支援・子育て応援演奏会として実施されたものであり、東日本大震災からの避難者が無料招待された。また、2010年からは「山形のち

の電話・チャリティーコンサート」に音楽仲間(ソプラノ：高橋まり子、チェロ：増川大輔、ピアノ：須藤恵美子)とともに主体的に参加・主演し続けている。さらに、2012年2月には、「小松原庸子スペイン舞踊団50周年記念公演」を新国立劇場中ホールにて演出した。「椿姫」「カルメン」「トスカ」のオペラ3作品を短縮し且つフラメンコによる舞踊で上演するという企画で、20名以上のスペイン人キャストも参加した公演であった。阪神大震災の翌年と翌々年には、知的障がい者1000人が集う場でのコンサートの依頼を2年連続で受けて、『みゆ〜じ館』(著者が主宰する音楽集団)公演として実施した。(共演 歌：春口雅子、ほか)

《参考文献》

- 1) 池内戸友次郎ほか：「新音楽辞典 楽語」, 音楽之友社
- 2) 近森一重：「音楽通論」, 音楽之友社
- 3) 鈴木静哉・竹内ふみ子共著：「明解・音楽用語辞典」, ドレミ音楽出版社
- 4) 野口三千三：「野口体操 からだに貞(き)く」, 柏樹社
- 5) 高橋寛・田中ふみ子共著：「人間オーケストラ・体は楽器だ!」, いかだ社
- 6) 坂東貴余子編：「こどもの歌ベストテン」, ドレミ音楽出版社
- 7) 平野章子：「ピアノ・コードの押え方」, ドレミ音楽出版社
- 8) 坂東貴余子編：「シニア世代の思い出ソング」, ドレミ音楽出版社
- 9) 伊東一郎監修：「基本・人体解剖図」, 金園社
- 10) 近藤芳朗：「自彊術」, (株)朝日ソノラマ
- 11) 羽陽学園短期大学自己評価委員会：「自己点検・評価報告書」平成18～21年度版, 羽陽学園短期大学自己評価委員会
- 12) いわむらかずお：「14ひきのこもりうた」, 童心社

SUMMARY

Hiroshi TAKAHASHI:

The Way to Master Singing and Playing with Piano about 2 Songs for Children in Four Months for even So Many Unlearned (in a part of Music) Students (Part 3)

Where is the way to master singing and playing with piano about 2 child's songs in four months for even so many unlearned (in a part of Music) students ?

This paper aims to consider how to get those way in many lesson (in Uyo Gakuen College) of those 17years.

(Uyo Gakuen College)